

レファレンス

コーナー

ボリビアのいまを知る手がかり

加藤真穂

南米・ボリビアで本年一月二日、社会主義的政策を掲げたエボ・モラレス社会主義運動党首が、先住民として初めて大統領に就任した。反米・反グローバリズムの姿勢をみせる同氏は就任早々、天然ガス産業の国有化や、米国によるコカ根絶政策に異議を唱え衆目を集めている。同国は、一九八〇年代の経済危機後、他のラテンアメリカ諸国に先がけて世銀・ＩＭＦの構造調整を受入れ、新自由主義的な経済政策を実施してきた。しかし外資は鉱業など特定の産業に集中して有効な失業対策にはならず、政府の福祉削減策などによって貧富の格差がかえって拡大した。新自由主義に対抗した社会主義的政策とともに、同氏は先住民の復権のための政策も模索している。同国では、全人口の五五％を先住民が占めるが、政権や議会は今も白人が主体で、先住民の政治参加の機会拡大が課題となっている。また、コカ葉栽培農民の指導者である同氏は、先住民の利益の擁護、文化の維持の観点から、伝統作物でコカインの原料となるコカ葉の合法栽培を推進する考えを強調している。大きな方向転換

を目指す同国について、関連する資料をとりあげたい。

同氏は「ボリビアの先住民が五〇〇年間、不正な社会構造の中で虐げられながらも抵抗活動を続けてきたのは無駄ではなかった」と述べているが、その被抑圧の歴史はアンデス諸国に共通するものがある。青木康征『南米ボトシ銀山—スペイン帝国を支えた「打出の小槌」—中公新書二〇〇〇年』ではスペイン植民地時代に発見されたボトシ銀山において、先住民を酷使した「ミタ労働」による銀生産の実態と、先住民社会の変容と破壊について論じている。

ボリビアでは、先住民運動が社会的に影響をもってきた。Ｓ・リベラ・クシカンキ著『トウバック・カバリ運動—ボリビア先住民の闘いの記憶と実践—（一九〇〇年—一九八〇年）』（吉田米人訳 御茶ノ水書房一九九八年）は、アイマラ系先住民の復権運動として始まり、都市部に住む先住民・農民の文化復興運動を経て、農村の労働組合運動へと受け継がれ、一九八二年の民政移管を求める過程で主導的な役割を果たした「トウバック・カバリ運動」と、その背景について論じている。

一九九〇年代以降は、政府の新自由主義的開発路線に対する抗議、米国の経済援助を条件としたコカ減反政策に対するコカ栽培農民の抵抗が集約した反政府運動が活発化した。二〇〇三年に、サンチェス政権を崩壊に追いやった、天然ガス輸出問

題、水道の民営化などをめぐる一連の先住民運動と社会情勢については、藤田護「二〇〇三年一〇月政変から改憲議会へ—ボリビア政治情勢への視点—」『グローバル化に抵抗するラテンアメリカの先住民民族』（太田昌国他著 現代企画室 二〇〇五年）が参考となる。

ボリビア経済は、天然ガス、大豆、亜鉛など一次産品に依拠したもので、その成長メカニズムは雇用創出や貧困解消に限定的である。さらに新自由主義的改革の影響で、富の偏在、貧困問題が深刻化した。コカ減反や密輸の取締まり強化がインフオーマールセクターの所得と雇用に影響を与え、低所得者層の生計維持を直接に脅かしたことが、反政府運動や暴動などの背景要因となっている。人種・言語・文化的多様性と、地理・歴史的要因から分断、格差という社会構造を抱えるボリビアの現状を、経済・政治・社会と多角面から検証し、ボリビアの今後の発展の方策を展望した「人間の安全保障と生産力向上をめざして」（国際協力機構国際協力総合研修所 二〇〇四年）は同国を広く知る大きな手がかりとなる。

主要産業である鉱業については、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）金属資源情報センターのサイトで、ボリビアを含む主要産国毎に、最新の鉱業ビジネス環境の変化をとりまとめた報告書『世界の鉱業の趨勢』や、地質・鉱床、探査状況等に関して網羅的にま

とめた報告書『資源開発環境調査』を参照できる。

農業については、『ボリヴィアの農業—現状と開発の課題』（国際農業協会 二〇〇一年）が詳しい。清水達也「ボリビア—大豆輸出の拡大と食料生産の停滞—経済自由化以降の農業開発」（本誌二〇〇二年七月号 *policy*）は、政府の非伝統的産品輸出促進政策により一九八〇年代半ば以降拡大した大豆生産の現状と、食料生産を中心とする伝統的農業部門の開発への取り組みについて説明している。コカ葉栽培については、作物転換を推進し、代替的所得源獲得を支援するプロジェクトなどが実施されてきたが大きな成果はあげられていない。国連薬物犯罪事務所（UNODC）の報告書 *World Drug Report*（UNODC 二〇〇五年）、*Bolivia Coca Survey*（UNODC Government of Bolivia 二〇〇五年）では、コカ葉栽培量の推移や取引価格などのデータを参照できる。

現在推定約二万四〇〇〇人のボリビア日系人社会については、『ボリビアに生きる—日本人移住二〇〇周年誌—（ボリビア日本人移住二〇〇周年移住史編纂委員会編 二〇〇〇年）が詳しい。柳田利夫編『ラテンアメリカの日系人—国家とエスニシティ』（慶應義塾大学出版会 二〇〇二年）では、複合社会のボリビアの姿が窺い知れる。

（かとう まほ／アジア経済研究所図書館）